

大阪インターナショナルチャーチ

日付: 2013年4月21日、年次総会説教

ダニエル・エルリック牧師

タイトル: 教会で仕える

聖書箇所: ローマ12:1-8

中心聖句: ローマ12:1

I. 導入

おはようございます。ペトロ**第一4:10**で、ペトロはこう語ります。「あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。」今日の午後、年次総会が開かれます。そこでは、たくさんの兄弟姉妹がさまざまな方法でOICの奉仕に携わっておられるという報告が聞かれるでしょう。主とお互いに仕えてくださりありがとうございます。神の祝福がありますように。

たくさんの人が、教会奉仕に時間と才能を惜しみなくささげてくださいています。けれども、しなければならないことはまだまだあります。そこで今朝、皆さんにお勧めしたいと思います。この教会で、またこの地で、神がさらに栄光をお受けになるため、奉仕において前進し、率先して仕えようではありませんか。ヘブル人への手紙の著者は、このように書いています。ヘブル**10:**

23-25 「**10:23** 約束してくださったのは真実な方なのですから、公に言い表した希望を揺るがぬようしっかり保ちましょう。**10:24** 互いに愛と善行に励むように心がけ、**10:25** ある人たちの習慣に倣って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合いましょう。かの日が近づいているのをあなたがたは知っているのですから、ますます励まし合おうではありませんか。」



教会での奉仕について話を進める前に、奉仕をする動機について少し説明したいと思います。ローマの信徒への手紙を少しご覧ください。ローマ**1:17**で、パウロはローマの信徒への手紙のテーマをこのように述べています。「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです。」

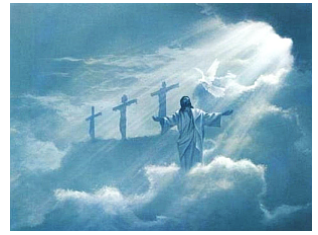
ここでの焦点は、信仰によって神から受けた義です。義の賜物は神の恵みとあわれみによってのみ可能になります。それは、イエスの十字架上の死によって与えられたのです。ローマ**3:22-2**はこう語ります。「**3:22** すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。**3:23** 人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、**3:24** ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」

私たちは皆罪人で、自分自身を罪と死から救うことができません。しかし、神は、イエス・キリストの御業をとおして私たちに救いと永遠の命を与えてくださいました。人がイエスに信仰を置くなら、創造主なる神との平安を得ます。ローマ**5:1** 「このように、わたしたちは信仰によって義と



されたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、」

この平和は、行いによってではなく、イエスを信じる信仰によって得られることを、パウロは明らかにします。ローマ10:9「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。」



ローマ書1-11章で、パウロはキリストを信じる信仰の教理を告げます。けれども、教理の知識を私たちに詰め込むことが目的ではないと思います。むしろ、教理の実践に専心するよう促そうとしているのでしょう。ですから、今日はパウロと一緒に、私も皆さんにお勧めします。イエスへの献身を新たにし、御名による愛の奉仕に専心しましょう。では、ローマ12:1-8から、パウロが記した言葉を読みましょう。

II. 聖書朗読 ローマ12:1-8 (新共同訳)

12:1 こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。12:2 あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。12:3 わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。

12:4 というのは、わたしたちの一つの体は多くの部分から成り立っていても、すべての部分が同じ働きをしていないように、12:5 わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。12:6 わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、12:7 奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。また、教える人は教えに、12:8 勧める人は勧めに精を出しなさい。施しをする人は惜しまず施し、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は快く行いなさい。

III. 教え

ローマ12:1はこう語ります。「こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。」「こういうわけで」という単語に注目して下さい。この言葉から、ここまでの教えを指して、そこからパウロが結論を導き出そうとしていることがわかります。では、どんな教えを語ったのでしょうか。パウロは多くを語りましたが、ここで「神の憐れみによって」とありますので、イエスを信じる信仰によって得た神の恵みあわれみについての教えを指していると考えられます。

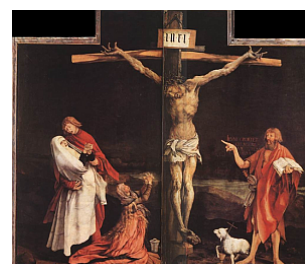
この箇所は転換点です。ここから、パウロが目指していたことがわかります。それは、神の愛への感謝で私たちの心を満たし、その気持ちを行動に移させることです。パウロは、生けるいけ

にえとなりなさいと命令はしません。勧めているのです。私たちの救いは、行いによるものではありません。とは言え、神に仕えるのはとても有益なことです。パウロは言います。「自分の体を献げなさい」と。自分自身のすべてを神にささげるべきですが、ここでパウロは特に体と言っています。奉仕活動には体が必要だからでしょう。

神の大いなるあわれみと愛にふさわしい応答として、神を礼拝しなさいと勧めます。自分の体を生けるいけにえとして神に献げることによってそうするのです。「生けるいけにえ」という表現は、ユダヤ人には奇妙に思えたことでしょう。ユダヤ人は、会堂で動物のいけにえをささげる習慣がありました。けれども、いけにえは死んだいけにえでした。動物は殺されてから、祭壇で焼かれました。ここでパウロは、生けるいけにえという新種のいけにえについて語ります。クリスチャンが自分の人生を日々刻々と神にささげるいけにえです。



イエスご自身が、生けるいけにえのお手本です。イエスが人として生きた人生はいけにえそのものでした。イエスは来られ、人に仕えるために人生をささげ、私たちの罪の代償として十字架で死ぬほどまで、ご自身をささげられたのです。しかし、十字架で終わりではありませんでした。十字架は、新しい復活の命につづく入口だったのです。イエスは弟子たちにご教えられました。マタイ10:38-39「10:38 また、自分の十字架を担ってわたしに従わない者は、わたしにふさわしくない。10:39 自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」この箇所は、生けるいけにえが命をもたらすという考えを示しています。神に命をささげると、新しい命を見出します。



アッシジの聖フランチェスコはこれらのことを思いつつ、平和の祈りを書いたのでしょうか。

主よ わたしをあなたの平和の道具としてお使い下さい

憎しみのあるところに愛を いさかいのあるところにゆるしを 分裂のあるところに一致を
疑惑のあるところに信仰を 誤っているところに真理を 絶望のあるところに希望を
闇に光りを 悲しみのあるところによろこびをもたらすものとしてください

慰められるよりは慰めることを 理解されるよりは理解することを 愛されるよりは愛すること
を わたしが求めますように わたしたちは与えるから受け ゆるすからゆるされ
自分を捨てて死に 永遠の命をいただくのですから

神と人のために生きるなら、己に死ぬこととなります。その過程で、私たちは新しい命、すなわち、喜びと平安に満ちた人生、神を喜ばすことだけに心を注ぐ人生を見出すのではないのでしょうか。自分が神に仕えるためがあると自覚し、神の働きとみこころとに自身をささげていくなれば、私たちは神の喜ばれる生けるいけにえとなります。私たちがそのような決心をするところに導くことが、パウロの念頭にずっとあったのでしょうか。ただし、それだけではありません。パウロが求めるのは、神への完全な献身です。



こんな古いジョークがあります。にわとりと豚が道を歩いていると、教会で朝食祈祷会があるという看板が目に入ります。にわとりは言います。「私たちもお手伝いしようよ。私が卵を生むから、君はハムをあげたらどう？」豚が答えました。「ちょっと待ってよ。卵をあげるのは手伝いだけど、ハムになるのは完全な献身だよ！」

たいていの人は、奉仕の働きを手伝います。一方、パウロは完全な献身にともなう祝福を経験しました。どんな犠牲を払っても神に仕えるという献身の心です。神との絆をいっそう深めたいと思うなら、完全にささげることです。完全にささげても、行きつく先は死ではなく豊かな新しい命です。

ヨハネ10:10bで、イエスはこうおっしゃいます。「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」豊かな命を受けたいと思いませんか。躊躇していても手に入りません。神とこの世における神の働きのために、生けるいけにえとして自分自身をささげる人が大勢必要です。イエスは十字架でご自身の命をささげ、私たちの罪の代価を払ってくださいました。天でこのお方とともに過ごす永遠の命という賜物をいただけるのは、そのおかげです。私たちは謙虚になって、この賜物を主から受けとらなければなりません。また、受け取ってから、イエスが成してくださったことに私たちはどう応えるでしょうか。

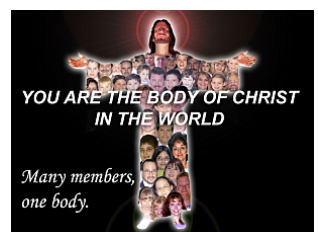


パウロは、このように勧めます。罪を捨て、考え方を改め、神のみこころを求めて従い、へりくだって歩み、神に仕えなさい。ローマ12:2-3「12:2 あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにしてお自分を改めていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。12:3 わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。」

私たちをこの世の型にはめようとする圧力があります。世間の人は、私たちにも同じように罪深い生き方をさせようとしてくるでしょう。「みんなやっているじゃないか。少しなら大丈夫だよ。罪かもしれないけど、君はいつも頑張っているのだから、楽しい思いもしなきゃ」というわけです。この世は誘惑でいっぱいです。この写真が言おうとしているのは、善良な心の持ち主にも誘惑がたくさんあるということです。けれども、キリストのうちにある私たちは、この世のやり方や慣わしに同調する必要はありません。美しい者へと変えていただけるのです。心と思いがキリストに留まっているなら、みこころを知るようになります。また、主の道を歩めるようにもなるでしょう。



人は一人ひとり、唯一無二の存在です。神の特別な作品です。みんな違いますが、それでよいのです。ローマ12:5-6aで、パウロはこのように教えます。「12:5 わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。12:6 わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、」神



の恵みによって、人は異なった賜物と役割を持っています。それは良いことです。みんなでキリストの体をなす、つまり完成されるのです。

パウロがこの後に記したのは、基本的な霊の賜物のリストです。これらは「動機を与える賜物」とも呼ばれます。私たちが何をするかだけでなく、なぜそうするかに関わる賜物だからです。これらの賜物は心と関係があり、私たちがどんなことに動かされるかという根幹部分に触れるものです。

パウロは、6-8節で7つの賜物を挙げます。それぞれの賜物の持ち主に、賜物を使うようにと励まします。ここで挙げられた賜物は、**預言、奉仕、教え、勧め、施し、指導、慈善**です。クリスチャンは皆、少なくともひとつの賜物をいただいていると信じます。賜物を用いて一生懸命主に仕えれば、教会は成長し、神は栄光をお受けになります。与えられた賜物を隠したり、否定したり、無下にしたりしてはいけません。賜物を使うべきです。教会を建てるためであり、神に栄光をもたらすためです。



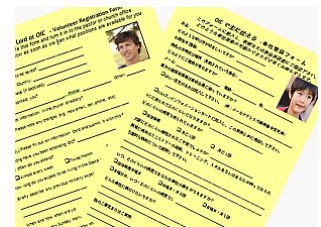
霊の賜物を見つけて用いることに励むなら、教会でも個人の生活でも、働きや役割が実り多い充実したものとなるでしょう。主が与えてくださった賜物を全員が用いるなら、私たちは神の御国と神の栄光のために多くを成すことができるでしょう。アーメンですか。アーメンです。

IV. 結び

今朝、みなさんにお勧めします。力を込めて言わせていただきます。霊の賜物を見つけて、神の栄光のために用いることに励みましょう。すべてをささげ、神との関係をいっそう深めるよう前進しましょう。

私たちは、主に毎日仕えることができますし、そうすべきです。家庭、職場、学校、など、行くところどこでもです。家庭や住んでいる地域で仕え、イエスの愛を分かち合うのは、とても重要なことです。しかし今朝は、教会の働きでどのような奉仕ができるかを各自考えて頂きたいと思えます。いろんな形ですでに奉仕しておられる方もたくさんいます。けれども、奉仕への参加を躊躇している人や、どうやって奉仕し始めたらよいかわからないという人もおられるでしょう。

そのお手伝いをするために、奉仕者登録フォームを週報と一緒にお渡ししました。奉仕する気持ちがあっても、なかなか始められないこともあります。このフォームにご記入いただければ、奉仕関係者と連絡を取ったり、奉仕を始めたりするのがスムーズになります。今日記入した方は、献金のかごに入れていただくか、礼拝後私に渡して下さってもけっこうです。少し時間を取って祈りたいという方は、それでもけっこうです。どのような奉仕ができるか、祈ってみてください。



もちろん、諸事情で今は奉仕に関われないという人もいるでしょう。それはそれでよいのです。今奉仕できなければ、できるようになったらお知らせください。奉仕者登録フォームを作ったのは、奉仕をしたいと思う人が奉仕しはじめやすくするためです。ですから、このフォームを

プレッシャーと感じないでください。ただ、奉仕できる状態にある人には、どんな奉仕に関われるのかぜひ祈っていただきたいと思います。

最後に、イエスのたとえ話から考えてみましょう。ご存じのとおり、タラントンのたとえ話には、裕福な男性が登場します。彼は長旅に出かける前、しもべ一人ひとりにタラントンを預けました。マタイ25:15「それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、」男性が旅から戻ると、預かったタラントンをどのように投資したか報告するよう命じます。

私たちに当てはめると、お金、労力、知識、霊の賜物や生まれ持った才能はすべてこのタラントンと同様に考えられます。このたとえ話の男性は主イエスです。イエスはご自身の命を罪のいけにえとしてささげるために来てくださいましたが、再び来られるときは、すべてのものを裁くために来られます。イエスが来られたら、主が与えてくださったものをどのように使ったか報告するよう、私たちも命じられます。たとえ話のしもべたちのように、受けたものを神の栄光のために賢く投資すれば、報いを得ます。

たとえ話の主人は、忠実なしもべに語りました。イエスが再び来られるとき、私たちも主にこう言っていただきたいものです。マタイ25:21「主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ。』」

祈りましょう。

V. 祈り